

青春

宮本百合子

青空文庫

青春の微妙なおもしろさは、その真只中にいるときは誰しもそれを、後で思い出のなかでまとめような形ではつきり自覚しないまま、刻々を精一杯によるこび、悲しみながら生きてゆくところにあるのではないだろうか。人間の精神のなかで青春というものの在りようもまたおもしろく微妙で、あながち年の若さということにだけ、根をおいているのでもないらしいのも興味ふかいところだと思う。中年と呼ばれる時代のなかにはらまれている青春。老年のなかにも不思議に蔵されていて輝く青春。そういうものもあることがわかる。そして、そういう青春が生活力として或は創造力として意外につよいもので、人類のよろこびといい得るよう

な仕事をした人々の生涯は、いつの時期も、それぞれの姿でしかも青春といい得るものを持ちつづけたように見える。若いというだけの青春で終るとすれば、それは悲しいものだと自分の身につけても思われるわけであろう。

いろいろなひとが、文学作品のなかで青春を描いているけれども、そういうものがいずれもその苦悩や不如意に苦しむ姿の若々しさという面で青春が語られているのは意味ふかく感じられる。漱石の何かの小説のなかに、青春というものは淋しいものだ、という文句があつて心にのこっている。それは先生が若い学生に向つていう言葉だけれど、若い女のひとにとつてもそれはあてはまる言葉ではないだろうか。女のひとの方が男よりそういう感情を

ぼんやりしか感じないのが普通かも知れないが、自分の十五六歳から後の心持を思い出すと、やつぱりそれを触れたところをもっていると思う。華やぎながら淋しがつている。淋しさのうちに華やぎが底流れているとでもいおうか。

若々しい寂しさについても私たちの時代と今の同じ年ごろの若い女のひとたちとは、随分ちがつて来ているのではないだろうかと思う。私たちの頃は、自然が体も心も多彩にひろがろう、触れよう、知ろうという欲望に燃え立たせているのに、周囲の習慣はなかなかそれだけのびのびしていなくて、いつも鬱屈するものがあった。今のひとは、いざとなると同じ埒で阻まれながら、表面の浅い日常では一応自由そうに羽根をのばしている。そこにま

た別の寂しさが湧いているのではないだろうか。求める心の寂しさ、ときめきと感じられていたものが、今は何か空虚さの感覚に近づいて来ているのではないだろうか。

それは社会が若い女に与えている自由が代用品であることから生じている悲劇であるが、私たちの女学校時代を考えると、大人と少女とはその生活感情を露骨に対立させられていたものだと思う。学校においても、家庭においても。

十五六のころ、こんなことがあった。私の父は建築家であったからいろんな画集をもっていた。折々静かな部屋でそれをくつて見るのがいい心持であったが、その中に一枚、少女が裸で水盤のわきにあっち向きに坐って片手をのばして水盤の水とたわむれ遊

んでいる絵があつた。丁度自分と同じぐらいの年ばえの少女の背中は美しく少しねじられていて、しなやかな脇腹の撓みにうけている光線の工合なんか、自分が裸になつてそうやって遊んだらどんないい気持だろうと思わせるような空氣の爽かさにみちている。その少女は、二つにわけて組んだ髪を、うなじのところに左右から平たくもつて来て、耳のうしろにまとめ、その両方の端にリボンをつけているのであつた。

季節も春であつたろうか。私はややしばらくその絵に見とれていたが、やがて、母の鏡の前へ行つて、絵のなかにいた少女と同じような髪に結った。そして父がくれた濃い牡丹色のベルベットの小幅のリボンを飾り結びにしてつけた。

その髪に結つて翌日学校へ行つた。そしたら担任の女先生が、一時間目の授業が終るとすぐ、一寸のこつていらつしやいといわれ、皆が列をつくつて庭に出て行つてしまつたあとのがらんとした教室の教壇の下で、髪についていわれた。誰もそんな髪はしていませんよ、大変目立つ髪ですね。あんな目立つ髪をしているのは誰だと物笑いになりますよ、いずれあなたのことだから、何かの絵でも御覧になつたのでしょうか、おやめなさい。そういう意味のことを、こわい表情で凝つと目を据えていわれた。

一番自分に似合う髪をやつと見つけたと思つたら、そういうわけなので、私は悲しいし、いやだし、心持をもてあまして、それから当分はまるで桜井の駅の絵にある正行のように、白い元結い

で根のところを一つくくっただけの下げ髪にしていたことがあった。大抵のひとは前髪をとってすこしふくらしたお下げにしていたが私はそれがどうしてもきらいであつた。髪ぐらい自分の頭に生えているものなのにどうしてすきに結っていけないのだろう。監督するものの心理に立つて見ることは当然出来ないのだから、本当にいやだ、と沁々思つて、大人のきらいさを痛いように思うのであつた。

髪なんか、女の子が自分の気持を表現してゆく第一の手ははじめのようなどころがあるのも面白い。そして、またきまつて下らない監視の目が向けられる第一のところであるのもおかしいと思う。例えばパーマネントのことについてのよう。

目白の女子大学には、まだ成瀬校長が存命であつて、私が英文予科の一年に入つたときは、ゴチツクまがいの講堂で一人一人前へ出て画帳のようなものへ毛筆で何か文句を書かされたりした。

私は大變本氣な顔つきで、求めよ、さらば与へられん、という字を書いたと覚えている。実践倫理という時間があつて、その時間には、大学部の生徒は皆一同講堂にあつまつて、成瀬校長の講義をきき、それを片はじから筆記するのであつたが、講堂にみちる絶え間ない微風のような字をかく音を超えて、熱氣をふくんだ校長の声は盛んに、自由とか天才とかいう言葉を吐いた。

若い心にそれらの響は決して魅力なくはないのだけでも、つまり何が云われているのか、私にはどうしてもみこめなかった。

そういう大きい精神の飛躍を示すような声が響いている一方、あすこは本当に妙な女の氣持が支配していて、女学校からずっと入って来た人が、外から入って来た生徒に、指導する権利をもっているような風があつた。運動会か何かあるというとき、そういう一人の同級生が、私が前髪をわけて髪を結っているから校風に合わない、その髪を直して運動会へ来るように、といった。

そのときは、もう十六ではなかつたし、仮にも大学というところで、校長はあんなに自由とか天才とかいうくせに、何たるけちくさい性根であろう、と大いに腹を立ててそんな校風なら髪は直さないが運動会へなんか来ない、と行かなかつたこともあつたりした。この学校に一学期しかいなかった心持にこんなことも作用

したと思う。

髪のことと切ない思いをしたのは私ばかりでなく、女学校のとき、もう二人の不運な道づれがあつた。私のはともかく自分の好きを立ててのことであつたが、あとの二人は生れつきが如何にも豊かな髪で、それが不運の源であつた。すこし前髪をゆるめたくらいでは、その素直で房々した長い髪は小さい頭の上におさまりかねて、自身のつややかなおもさでいつもゆるんだような形になり、その二人の体つきがその髪のくずれにふさわしくて、特別な味わいがあるのであつた。夢二の描く若い女の髪かたちを髣髴させたが、叱られたり、睨まれたりするのとはそれが夢二に似ているからではなくて、丁度その頃、私たちの崇拜をあつめていた一人

の若い長身の女の先生の髪が、そのような形をしているから、というのが原因であつた。二人の睨まれるのは、時もあるうに音楽の時間であり、ひともあるうに音楽の先生からであつた。赤い綾木綿を張つたベンチにズラリとかける。先生はピアノの前にいられる。それから挨拶のためのコードが弾かれるまでの一分間。紫紬の羽織を着た先生の目が席を一わたり見まわすとき、いつもそこには何ともいえないやな息苦しいような沈黙と緊張があるのであつた。そのままピアノが鳴り出せば、ほつとして発声の練習に入るのであつたが、さもないときは、焦立たしさを仄めかした眉目の表情と声の抑揚とで、その生徒の名がよばれ、その髪はもうすこし何とかならないんですか、といわれるのであつた。

二人の生徒のその髪がどうにもならないように、その長身の先生を崇拜する心持も、どうしようもないものだった。

この先生のおかげで、私は四年、五年と二年を苦しいなかにも知識のよろこびをもつて成長することが出来た。この先生が学課の単調さに苦しんでいる私の知識慾に流れ口を見出すきっかけをつけてくれた。ヘツケルの宇宙の謎という本を教えて、文学以外の分野へ読書の力をひろめても下すつた。

こういう時代を思いかえすと、私は震災で焼けてしまった昔のお茶の水の校舎の庭のいろいろな隅や石段を、懐しさに堪えぬ心で記憶の裡に甦らす。女高師の方を、私たち附属の生徒は本校と呼んでいた。本校の建物の主な一棟は古風な赤い煉瓦の二階建て、

正面大玄関の横の方にはり出した翼の間に、決してその扉は開いたことのない一つの凹んだ小庭があつた。雑草が茂っている石段に腰かけると、そこは夏でも涼しくて、砂利をしいた正門前の広庭を^{とかげ}蜥蜴が走ってゆくや、櫨の大木の幹や梢が深々と緑に輝く様が、閑静な空気のなかに見わたせた。遠くの運動場の方からは長い昼休みのさわぎが微にきこえて来る。私はそこのかくれ場所^で、何というひそかなたのしきでメレジェコフスキーの小説やトルストイとドストイェフスキーという評伝などを読んだことだろう。

心ときめくかくれ場所はもう一ところあつた。それは本校のその建物の真裏で、となりの聖堂の土塀に近いところに、一つづ

きの小高い櫟の茂った丘があつた。一年生として入学した年の夏、その丘の下いっぱいが色とりどりの罌粟けしの花盛りで、美しさに恍惚としたことがあつた。それ以来、そこは私をそつと誘いよせる場所になつて、よくそこへも本をもつて行つてよんだ。落葉の匂い、しつとりとした土の匂い、日のぬくもり。それらは、本の面白さを増すばかりか、そういうところで本をよむ趣を猶更味わいふかい感じにさせるのであつた。

そんな風にして、どの位本をよんだことだろう。

家ではその時分、玄関わきの小部屋が私の部屋になつていた。土庇の深く出た部屋で、その庭には槿と紫陽花と赤い絹糸の総をかけたような芽をふく楓が一株あつた。露の臺も出た。その小部

屋は、親たちのいるところと、夜は真暗な妙にくねった廊下でへだてられていた。父や母は壮年時代の旺盛な生活ぶりで、どちらかというと自身たちの生活にかまけている。よく衝突もしていた。母が泣くこともあった。百合ちゃんはお父様とどこへでも行つて暮したらいいだろうと云うようなこともある。だが、それらは今思えばどれも熾な生活力に充ちた親たちの性格があげた波の飛沫で、私はそのしぶきをずつぷりと浴びつつ、自分も、あの波この波をその波のうねりに加えながら、暗い廊下を自分の小部屋へ引き上げて来る。その廊下の暗さが独特によかった。部屋の入口をさぐりあてて、電燈をひねって、澄んだ狭い部屋の明るさのなかに浮出して来る大きい手ずれた素朴な机は、祖父のお下りという

ものであつた。その机に向つて坐る。時間の一粒一粒が私に何かを語りかけ、私も何かを語りかえさずにはいられないような気分である。そこで、心臓が口からとび出しはしまいかと思うほど胸轟かして文房堂から買つて来た原稿紙をひろげて、何かを書き出す。そのようにして文学というものが、身に近いものとなつて、永年まともりなく自分を表現するてだてであつた音楽がやや遠いものとなつて来たのであつた。

跣足になつて庭を掃いたり、昔風のポンプで水まきしたり、お客様のときは御給仕役もまわつて来た。久留米緋の元禄袖の着物に赤いモスリンの半幅帯を貝の口に結んだ跣足の娘の姿は、それなり上野から八時間ほど汽車にのせて北へ行つた福島の田舎の祖

母の黒光りのする台所へも現われた。

その村は明治に入ってから出来た新開の村で、子供の頃から私がよく行つた時分は貧村であつた。大きい池が三つ並んでいて、一番池二番池三番池は貯水池となつた。菱の花が白く咲く一番池のぐるりは夏草の高く茂つた馬場で、夏そこへ寝ころんで夕焼けを見ていると、いつしか体が夏草の中から泛んで七色八色の鱗雲の間をゆるく飛んで行くような気がした。そんな景色と村道の赭土にくつきり車の軌の跡のめりこんだ荒涼とした有様、鶏や馬の間でのいろんな婆さんや爺さんの他愛もない暮しぶりは、心に刻みつける何かをもつて印象に迫つて来るのであつた。

祖母の家の裏口の小溝の傍に一本杏の樹があつた。花も実もつ

けない若木であつたが柔かい緑玉色の円みを帯びた葉はゆたかに繁つていた。夏の嵐の或る昼間、ひよつと外へ出てその柔かい緑玉色の杏の叢葉が颯さつと煽られて翻つたとき、私の体を貫いて走つた戦慄は何であつたらう。驟雨の雨つぶが皮膚を打つて流れる。そのこわいうれしきで、わざと濡れに出た。あれはただ一つの冒險の心なのだろうか。官能と精神とが不思議に交錯して、まざまざとした感覚はまざまざとした精神の印象となつて、表現の慾望となるのであつた。そんな時代、詩は一つもかかないでいきなり小説をかき出したことは面白いと思う。「貧しき人々の群」というような小説そのものがいつてみれば一つの散文詩だと、いえるのであつたらうか。

やはりその田舎の村へ雪のつもった冬に行つたことがあつた。夜風が街道を吹きはらつていて、電柱のうなる音がしていた。ふと、その風が遠くの街道からカチューシャのうたをのせて来た。学生らしい歌いっぷり、その声は段々近づいて来て、また次第に遠く消え去つた。それは東京で松井須磨子のカチューシャとともにその頃はやりはじめたばかりの歌であつた。それをうたう人は東京から来た人しかなく、男の声でそのうたをうたう東京から来た人といえ、その村では誰それとすぐわかる人であつた。私はそれにじつと耳を傾けている。雪がつもつて凍つた外の夜はいかにもひろく、むこうの山並までもつらなっているなかを、マント姿で行く人の姿を浮かべているのであつた。

十九のとき、十五であつた弟が亡くなつた。それより前に十六のとき、五つであつた妹がなくなっている。そればかりでなく、その間にはもう一人、人形のような顔をした赤ん坊が一人、母が髪を結つていたついそのうしろで、いつの間にやら息をしなくなつていたこともあつた。

十五で死んだ弟は、私の恐怖であつた。彼は何という敵意を私に対して抱いていたことだろう。この弟は、すぐ怒つて、私の髪をつかんで畳の上へひき倒した。そして殴つたりし、蹴りもした。私にだけそんなことをした。私の困るようなことを見つけるのがうまくて、ああ困つたと思うと私はすぐ、その弟の大男並に脊丈と力のある体と、肉の厚い怒つた顔つきを思い合わせ、告げ口

されることを思つて閉口するのであつた。この弟の何か不調和であつた不幸な肉体のなかでは、早すぎる小悪魔が目覚めて、荒れたのだつたろう。その小悪魔の嗅覚が、ごくの身近に、やはり目さめている性の異なつた同類をかぎつけて、しかも親睦をむすぶすべもない条件を、そんな野蛮さで反撥したのであつたろうと思う。

兄弟、姉妹の間にあるそういう微妙で苦しいものも、親たちにとつては一律に子であるということから余り気にかけないのも、自然であるのだろうか。私はよくその弟には殺されそうに思つて号泣したくらいだつたのに。

この弟は、大正九年の大暴風の日に発病してチフスから脳症に

なつて命をおとした。この弟の生命が一刻一刻消えてゆく過程を私は息もつけないおどろきと畏れとで凝視した。その見はつた眼の中で、彼に対するひごろの思いもうち忘れ、臨終記として「一つの芽生」という短篇をかいた。その中では克明に、一心に、生命の火かげのうつろいゆく姿を追っているのだけれど、私は二つの眼がそんなに乾いて大きく睜られて、凝つとその臨終に息をつめていたということも、自分の無意識の心理にふれて今考えれば別の面からかと思ひひそめられる。あるとき泣かない自分の心の必然というものが、意識の下まで自分ではさぐり入れられていなかったと思う。若い生きる力は、そういう我知らぬエゴイズムに満ちるときもあるのだ。

初めの結婚をしたのは二十一歳で、五六年その生活がつづいた。ずっと年上であつた相手のひとが、もう生活にくたびれかけていて、結婚生活ではひたすら安穩に、平和に順調な年から年へ日々がくりかえされることを望む心持であることがどうしても納得ゆかなかつた。結婚生活こそ出発と思ひ、そのためにこそ貧窮もその身で知っている人と結婚したのに、一つ屋根の下に暮して見れば、自分は翔びたくて日夜もがいて羽搏くし、そのひとは翔ぼうともせず小さい日向で羽交いの間に首を入れるばかりか、私の脚にいつの間にかついている短い鎖を優しく鳴らして、こんな鎖にも、いまに馴れるよ、と慰めてくれる。馴れる！ 何という怖い言葉に響いたろう。馴れる！ 人間はそんなにどんな生活にも馴

れるものなのだろうか。私はいやだ。馴れるのはいやだ。

それからの数年は、二人にとって全く苦しい格闘の歲月であつた。相手のひとにとっては、私がそうやって書く字の形までまろきり變つてしまったほど、もがき苦しむわけがどうしても本質で理解されないのだし、私としては自分の心のうちにあるその人への愛と憎みとの間で揉みぬかれる始末であつた。

そんな苦しい或る日、鎌倉の海岸に保養していた従妹たちとところへ遊びに行つた。四つばかり年下の従妹はまだ結婚前で、従弟たちと心も軽く身も軽く、小松の茂つた砂丘の亭で笑いたわむれている。そのなかに打ち交わりながら、自分の苦悩がこの若い人たちとは無縁であること、そして、自分の苦しみは見つともな

くて重苦しいことを何と切なく感じたことだろう。午後になって、みんな海岸へ出かけた。暖かい晩秋の日光が砂丘をぬくめているところへ、一列に並んで腰をおろしていた従弟たちの一人が、やがて急に何を思いついたのか、一寸中学の制帽をかぶり直すとピーツと一声つんぎくような口笛を鳴らして、体を横倒しにすると、その砂丘の急な斜面をころころ、ころころと、遠い下まで転って行った。びっくりしたように、あら、といって見ていた従妹も、声高く笑いながら派手な縞の着物の裾を抑えるようにして体を横にすると、わーといいながら同じように、その斜面をころがって行った。見ている私の喉一杯に、涙とも笑いとも名状しがたいものがつき上げて来た。裙を、ぴったりつけた脚の間に捲きこむよ

うにすると、私はきつく目を瞑って、坐っているその場所から、体を倒して砂丘をころがって行つた。夢中で、ああこのまんまころがって、何処かへころがり消えてしまえたらと、やきつくように思いながら。従妹弟たちと私とは、何度も何度もそうやって転って遊んだ。ころがる最中の失神のような氣持をむごく楽しみながら、私は一度は一度と益々荒つぽく自分の体を砂にまぶしてころがり落ちた。

〔一九四〇年三月〕

青空文庫情報

底本：「宮本百合子全集 第十七卷」新日本出版社

1981（昭和56）年3月20日初版発行

1986（昭和61）年3月20日第4刷発行

底本の親本：「宮本百合子全集 第十五卷」河出書房

1953（昭和28）年1月発行

初出：「婦人朝日」

1940（昭和15）年3月号

入力：柴田卓治

校正：磐余彦

2003年9月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青春

宮本百合子

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>